

ユースフォーラム「青年力で開く日本の未来」

第2回 いる場所から「社会を変える」

【出席者】

橋元太郎 [創価学会男子部長]
浅井伸行 [創価学会青年平和会議議長]
樋口公人 [NPO法人HUDEC理事CEO]
小櫻朋子 [看護師]
水嶋絵里佳 [相模女子大学4年生] ほか

「働くこと」の意味をとらえ直す

橋元太郎 社会起業家として活躍されている駒崎弘樹さんの活動は、ワークライフバランスという部分でも大きな革命を起こしていらっしゃいます。

若い世代にとって働き方はとても身近で重要なテーマです。多くの若者と話をしていると、非正規雇用の増加や派遣社員として単純作業の仕事しかできないといった状況の中で、働くことへの意味が見いだせないという声を多く聞きます。こうした状況は青年世代にとって非常に切実な問題です。

その一方で社会的起業をしたいという声もよく聞きます。・社会に貢献したい・といった視点が若い世代の仕事の基準になってきているとも感じます。駒崎さんは、そのロールモデルとして非常に大きな役割を果たしてこられました。

創価学会の牧口常三郎初代会長は「美・利・善」の価値論を展開されました。その価値論からいえば、自分が好きなことで（美）、利益を生み出すことができ（利）、社会に貢献できる（善）という三つの価値を満たしていく仕事、目指すべき仕事であるという考え方ができます。

今の社会の中で、働くことに使命をどう見いだしていくかという点で葛藤している青年が多くいます。

この働くことの意味について、駒崎さんはどのようなお考えでしょうか。

駒崎弘樹 働くことについて、これまでは賃金労働という視点だけで語られてきました。しかし、もともとはもっと広い意味があります。「働く」の語源は・傍を楽にする・です。傍とは他者であり、楽にするというのは負担を軽減し、楽しくすることです。他者を楽にすることが「働く」の意味なのです。

江戸時代には二つの「働く」がありました。それは「稼ぎ」と「勤め」です。稼ぎは文

字どおりお金を稼ぐこと。そしてもう一つの勤めは共同体への奉仕です。稼ぎだけの人間は一人前じゃないといわれていました。

つまり、今のように会社に勤めて給料を貰うことだけが「働く」ではなく、家族という他者を楽にすることもそうだし、地域社会のために貢献することも「働く」なのです。

その意味では、いろいろな「働く」があっていいと思います。そうした多様な「働く」に関われることは、自分の人生を豊かにしてくれます。

仕事もできるし、家族も愛することができる。そして地域社会にも関われる。それらが当たり前のこととして認識される社会ができれば、所得は倍増できないかもしれませんが、幸福は倍増させることができると思います。

私は「働き方革命」と呼んでいます、そのように働くことの意味をとらえ直していくことで、虹のように多様で豊かな生き方ができると思います。

樋口公人 私は現在、NPO法人HUDECという団体を設立し、アジアの途上国に雇用を創出することや、日本人を対象にグローバル人材を育成することをミッションとして、活動をしています。

駒崎さんが学生時代に起業に至った経緯や、社会起業家として人脈やネットワークをどのように構築されているか、お聞かせいただけますでしょうか。

また、私は一信仰者として、「使命感」というものがとても重要な要素であるにとらえています、駒崎さんの場合、どのような使命感で事業を行っているのでしょうか。

駒崎 学生時代は、はじめからビジョンや使命感があったわけではありません。私の場合はさまざまな偶然と出会いながら自然と起業に至りました。

学生ITベンチャー経営者としての自分に疑問が生じ、一度フリーターになった後、現在のNPO法人を設立することになります。しかし、それらもはじめからビジョンがあったわけではなく、体験していく中で気づくことができたのです。その意味では「走りながら見つけていく」ことも大事なことだと思います。

人脈づくりについては、実は私は人見知りなので苦手なのです。名刺交換会などもなかなか自分から積極的にアプローチできません。

ただこの仕事を通して感じることは、ビジョンを掲げるとそのビジョンのもとに人が集ってくるということです。

政治家の方と接触する場合も、メリット、デメリットの話だけでは利害関係によってぶつかってしまい、不毛な接点で終わってしまうこともあります。しかしビジョンをきちんと前に出せば、つながることができます。その意味では、ビジョンを示すことでネットワークが生まれると感じています。

私の場合の使命感についていうと、事業をはじめた当初は、「馬鹿げた社会を俺が変えてやる」といった義憤のようなものがモチベーションの源泉でした。それが、活動をしてい

く中でだんだんと変化していきました。

仕事を通して、「このサービスがあったから正社員になることができた」「このサービスのおかげで子どもを安心して預けることができ、3人目を産む決断ができた」といった喜びの声を多くいただきます。そうした喜びの声にもっと触れたい、喜ぶ顔が見たいというモチベーションへと変化していったのです。

一人が声をあげ 一人が起点になる

小櫻朋子 現在、県立の病院で看護師をしています。

病院内には子育て中の看護師さんも多くいるのですが、院内には託児所がなく、子育てをしながら働くことはまだまだ厳しい環境です。

毎週水曜日をノー残業デーとする施策もありますが、実際にはその日に会議が入るなど実効性は低いというのが実感です。こうしたことに対して意見を上げますが、なかなか経営陣の考えを変えるまでには至りません。

駒崎 医療者や福祉関係者のワークライフバランスはとても重要なテーマです。なぜなら、そうした方々が日本のセーフティネットを支えているからです。

子育てをしながらでも働けるかどうか、そこを改善していくことができれば、日本の社会保障全体の「大らかさ」につながっていきます。

そのためには、院内保育所の設置や、病児保育への対応など政策的なサポートを行い、働きやすい仕組みをつくっていく必要があります。

本来、働きやすく、働きがいのある環境をつくっていくことは、離職率を下げ、組織の利益につながっていきます。その認識を、病院経営者や介護施設経営者は持つべきです。

そこを変えていく一つの手法として、知事や市長への手紙といったものがあります。たとえば、県や市のホームページから首長へ意見を届けることができます。

ほとんどの人が、そんな意見を送っても変わらないと思って利用していませんが、同じ意見が複数集まると、行政としてはそこにニーズがあると見て何かしらの対応を迫られます。

私も地元の投票所で、女性ばかりがお茶くみをしていることに違和感を持ったことがあり、それを声として上げました。すると次からは、男性職員もお茶を出すようになっていました。

そのような形で仲間と連携して声を上げていくことも、変化を起こす第一歩になると思います。

コミュニティの空洞化時代の創価学会の可能性

水嶋絵里佳 駒崎さんの活動に見られるように、子育ての負担を社会全体で担っていくことが求められる現在、地域において新しい絆が必要になってきていると思います。

私は一人親家庭で育ちましたが、周りの創価学会員の皆さんに見守られながら、地域のおじさん、おばさんたちが支えてくださり、今日まで成長することができたと実感しています。

私はこれから大学を卒業して教員になりますが、そうした地域の絆をつくっていくために教師の立場でどういったことができるでしょうか。

駒崎 今、子どもの7人に1人が貧困世帯に属しているという問題があります。

また貧困状況の背後には、経済的な貧困だけでなく、自己肯定感が持てない子どもの増加など、社会的な貧困も生じてきています。

そうした子どもたちは、たしかに問題を抱えがちになりますが、そのときに教師の理解度がないとその子どもを問題児と見なしてしまい、本当は学校や社会が包摂していかなければいけないのに、結果として排除することにもつながってしまいます。

教師という立場は、それを食い止められる機会を持っていると思います。それは、課題を抱える子を社会的包摂の絆の輪に入れてあげることです。

そのためには、親へのアプローチや、同じ悩みを持つ友人を親に紹介したり、社会的資源としての行政の窓口につないだり、または学校のスクールカウンセラーにつなぐなど、さまざまな方法があると思います。

教師の方を基点とした小さなコミュニティーをつくってそれらを共有していくことで、中・長期的に地域の絆をつくりだすことにつながっていくと思います。

浅井伸行 私たち創価学会青年部は、日常の仕事とともに、地元の町内会などに参加し、地域行事や町おこし、消防団などで、地域に貢献するさまざまな活動を行っています。

創価学会の地域活動の意義について、駒崎さんの率直な評価を教えてくださいませんか。

駒崎 創価学会のコミュニティーは見事だと思っています。

私の故郷である東京都内の団地では、老人が人知れず亡くなっています。コミュニティーが空洞化している状況に対して、地区ごとにコミュニティーを持っている創価学会のポテンシャルはとても高いです。これを社会変革に活用しない手はありません。

創価学会員の方々が、社会問題と向き合う中で、小さな解決策を生み出しながらそれを広めていき、さらにはそのような声を聞いた公明党がそれを政策に結びつけていく。まさに、「大きなNPO」ともいえる創価学会のそうした可能性に対して、大いに期待しています。

私も、ぜひ連帯して日本をよりよい社会へと変えていきたいと思っています。

※ワークライフバランス：仕事と生活を両立させること。また、そのような企業の施策目標のこと。

（月刊誌「第三文明」2013年3月号より）